
リトルタウン

多田野一兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルタウン

【Nコード】

N4200C

【作者名】

多田野一兵

【あらすじ】

田舎の電子部品関係の工場で働く慶と亮輔はこの4月から昇進。新しい仕事をひたむきに頑張っている。偶然、昔の彼女の香織と再会するが、なかなかお互いの想いが重なることがない。そんな中、突然の量産の対応のため中途採用で派遣社員を増員。その中に、慶の現場へ配属される奈美がいた。奈美はすぐに新しい仕事に溶け込んで行く。そして、上司として働く慶に次第に魅かれていく。

File 1 昇進

昔、この町は城下町として栄えていたそうだが、今はただの田舎町。

山脈の終点に位置し、裾野から平野が広がる。

平野には田園があり、そこにポツリと巨大な建物が存在する。そこは電器関連の工場。

大手家電メーカーの工場であり、高卒就職が一般的なこの町では、この工場で働くことがステータスとなっている。

この町にも、そして工場の中にも、様々な人間がいて、その人々が様々な「想い」を日々育んでいる。

「慶、おめでとう!!」

慶の先輩で、現場リーダーの亮輔が突然そう言ってきた。

慶は何の事だかさっぱりわからないが、「あ、どうもっす」と、適当に返事してみる。

「へえ〜、もう知ってるんだ!？」

亮輔が少し意地悪そうに言う。

「ちょ、まってください、すみません、何の事が教えてくださいよ〜」

慶は焦り気味に亮輔に問い返す。

亮輔は少し嬉しそうな顔をしながら、

「オマエ、4月からリーダーだ！ よかったな！！」
と、4月から昇進することを告げてきた。

「俺が現場の責任者になることになったんだ。
それで、オマエが俺の後を継ぐってこと」

「正式な辞令がもうすぐでるだろうけど、早くオマエに
知らせたかったからね」

亮輔も自分の事のように嬉しそうに言ってくれた。

「あ、亮輔さん責任者になるんだ！！」

それは亮輔さんこそおめでとうございます」

慶は自分と亮輔と一緒に昇進することがすごく嬉しかった。

慶と亮輔は、田舎にある電子部品製造工場で働いている。

お互いに高卒で就職し、亮輔のいる現場へ慶が新卒で配属されてきた。

それからはお互いに親友であり同僚であり、上司と部下でありと
親密な関係を保ってきた。

慶の相談にいつもしてくれる亮輔は、慶の心強い兄貴分でもある。

「慶、これからは俺たちがこの現場を引っ張っていかなくちゃいけないから
お互い頑張ろうな！」

亮輔も慶をパートナーとして、これから仕事をしていくことが嬉しかった。

4月

「中野 今日から現場のリーダーとして責任をもって職務にあたってくれ。」

森山も責任者になったことだし、お前たちは仲がいいだろ？

森山を盛り上げていってやってくれよ！」

田中課長は慶と亮輔を呼び出し、二人を激励していた。

「森山 お前は今日からもう1ランク上から物を見なくちゃならない。」

園田君はこの現場は初めてだから、しばらくは君も係長並に働いてもらわなくちゃいかんぞ。

中野もリーダーになったことだし、仕事はきつとやりやすいはずだ。

二人で力をあわせて現場を盛り上げていってくれよ」

「はい！」

二人は示し合わせたかのように「はい」の声が重なった。

「ほんとお前らは仲がいいな、はははあ」

田中課長は高笑いすると同時に二人の仲の良さと

互いの信頼関係が頼もしく思えた。

「頑張らせて頂きます！」

亮輔は気合の入った声でそう宣言した。

「僕も頑張ります！」

慶も負けずと大きな声で言う。

今日から二人で現場を管理していかなくてはいけない。
プレッシャーを感じながらも、これからの仕事が
二人にとっては充実した仕事になることが
手に取るようにわかっていた。

二人は昇格後のまだ慣れない初仕事も順調に進め、
生産の遅れも、大きな問題も無く4月度の生産を終える事ができた。

「6月から、生産増えるらしいぞ」

亮輔は係長から6月の生産状況を聞いてきていた。

「人も増やさないと、今は結構ギリギリだな」

「そうですね、数次第ですが、ここここに1人ずついないと
すでに限界近いからですね」

慶はパソコンの工程図を指差しながら亮輔に言った。

「そうだな、数わかったらすぐに人員補強の要請しよう
ま、そうは言ってもまだ5月がある。」

5月を順調に進める事もまず大事だぞ」
と亮輔は上司らしく慶に言ってみた。

「お、そうですね、亮輔部長!!」

「何言ってるんだオマエ、ま、いい。」

今日は久しぶりにメシでも食いにいくか」

慶の冗談を軽くあしらうと亮輔は慶を夕食に誘った。

「じゃあ、山下達も誘ってばあ」と行きましよう!!」

「なぐに親父みたいな事言っただか・・・。」
亮輔は自分の誘いにいつも応えてくれる慶が
本当の弟のように可愛く思えた。

File 2 再会

慶と亮輔は、現場の作業者数人の若者を連れていつもの居酒屋へ足を運んだ。

居酒屋は6人入る個室が6部屋あり、フロアにテーブルが数個、カウンターに数席とよくある程度の居酒屋だが、焼酎の品揃えがよく焼酎を好んで飲む慶と亮輔には丁度いい居酒屋だ。

「おまえら好きなだけ注文しろ!!」
上司らしく威勢がいい亮輔に

「お、今日は亮輔さんのおごりだぞ、ラッキー」
と慶は皆に意地悪そうな顔をして言った。

「やった、亮輔さんありがとうございます!」
まだ入社して3年目の山下も喜んだ。

「ばっかか、おまえら。」

今日はな、俺と慶のおごりだ。

俺一人が奢るわけじゃないぞ?」

「な〜んだ、俺もかよ〜」

亮輔が勝手に決めた割り勘も慶は嫌々ながらもそれを断ることはなかった。

「ま〜、そうと決まったらお前ら遠慮せず注文しろよ」
慶は後輩たち3人に少し太っ腹な所を見せる。

「心配するな、ここは俺が出しておくから。」

「まじですか、俺も出してもいいんですけど・・・」

亮輔は慶にも先輩らしく気を使い、割り勘の話は冗談であることを告げると

慶はそれは悪いと思ったのだが、正直あまりお金は持っていなかったのだ

自分も出しますとは言い切れなかった。

「心配するな、オマエこの前、車の部品なんか買ってただろ？」

俺はよくわからんが・・・ 今月は苦しいだろうが。」

亮輔は慶の事をよく知っていた。

「じゃ、お言葉に甘えて・・・、すみませんいつも」

慶は亮輔の面倒見の良さには世話になりっぱなしだった。

居酒屋で一通り盛り上がって、店を出ると慶が

「さーて、次はどこに行きますか??」

とやる気満々。

慶はこういう雰囲気が好きで、飲みだすと止まらない。

また亮輔も同じで二人と一緒に飲みだすと朝になることもしばしばだ。

後輩3人もそういう二人が好きでよく遅くまで付き合っが最後まで残ったことは未だ無いほどだった。

「じゃあ、クラージュ行くか!？」

亮輔がいつも行くスナックに行くことにした。

「んじゃ、そうしよう!」

「クラージュのママとゆきさんとも2週間ぶりっすね!」

慶はニヤついた顔でそう言いながら、クラージュへ向かった。

しかし、クラージュに到着すると、店のドアに

「4月28日～5月2日まで休業致します。」の貼紙があった。

「なんだ休みかよ〜」

「あゝ、なんかママこの前来た時に旅行にいくとかど〜とかって言うてなかったっすか？」

亮輔が残念がると慶が2週間前に来た時の話を思い出して話した。

「そっか・・・、んじゃさ、知らない店いつてみようぜ!」

亮輔が好奇心旺盛な目をして、皆に言うと皆もまんざらではなくこれまで行っただけの無い店に行くことにした。

「じゃ、この店の2件右側」

「お、いいね、そういうの」

慶は次に行く店の選び方を適当に言っただけなのだが亮輔もそういう選び方の適当な所が好きで賛成だった。

「じゃ、山下見て来い!!」

と、亮輔が山下を指名。

山下は仕方なく、クラージュから2件右隣にある、「深海」

と言う店を覗いてみた。

ドアを少し開けた山下は、初めての店で緊張したのかすぐにドアを閉め皆のそこへ走り戻ってきた。

「やっぱ、はずかしいっすよ〜」

すると数秒の間も無く

「お客さ〜ん、入らないの??

クラージュは昨日から皆で旅行に行つたみたいで、休みだけど・・・。

よかつたらウチ来ない?」

山下に気づいた深海のホステスが1人店から出てきてクラージュの前に立っている、5人に向かってそう行つた。

慶はふと思った。

「えっ??」

「あれ?、ケイじゃない?

久しぶり〜! わ〜、こんなとこでケイと会うなんて嬉しい! おいでおいで! 皆さんもおいでよ〜」

とホステスは慶との再会をすごく嬉しそうに言った。

「なんだ慶、知り合いか?」

亮輔がキョトンとして尋ねる。

「あ、はあ、高校の同級生で・・・」

慶もすぐにホステスが香織であることに気づいた。

「じゃあ、仕方ないな、そこ行ってみるか?

そこのおねえちゃんも綺麗だし」

と亮輔は他の後輩3人に尋ねる。

「はい！お姉さん綺麗だからいいですよ！！」

「慶さんの知り合いなら安くしてくれるかな！？」

と後輩達も乗り気だ。

「じゃあ、行きますか・・・」

慶はあまり行きたそうではないが、皆の空気に負けて
深海へ行くことにした。

「お、じゃあ決まりね！！」

さ～おいでおいで！」

香織は嬉しそうに5人を引きつれ、お店のドアを開けると

「ママ～、私の元彼氏とその他4名　ご来店です～」

と、恥ずかしげも無く大声で言った。

「えっ！？」と4人ほぼ同時に慶の顔を見合わせる。

「・・・、ゲツ、こいつ・・・」

慶はなんだか恥ずかしくなり、言葉にもならなかった。

「あらあらいらつしゃい、元彼氏さん？」

とママが駆け寄ると、他のホステス3人も

「どれ～どれ～、香織さんの元彼つて～」

と興味津々で近寄ってくる。

慶はすぐに気を取り直して

「そっ！俺が香織の元カレだけど、なんか文句あるか！？」
と4人に負けじと声を荒げた。

亮輔と後輩達はいいつなにやってんだ？と思っているような表情でその光景を見ていたが、すぐに

「さあ、さあ、早く飲ませてよ！！」

と亮輔が声を掛け、深海になだれ込んで行った。

お店に入ると、まだお客さんはおらず

香織が大声であんなことを言えたのも

客がないからなんだろうな」と慶は勝手に思い込んだ。

慶がボックス席の4人掛けソファに座ると、

慶のすぐ横に香織が割り込んで無理やり座ってきた。

亮輔の隣に1人と後輩3人に、ママと2人のホステスが付いた。

「しかし、慶さんあんまり格好良くないのに、よくこんな美人と付き合えましたね」

と後輩が慶の反応を楽しむかのように言ってきた。

「ふん、こいつが俺を好きだっていつてきたから、付き合ってたんだよ」

「な〜にい〜？ ケイの方から私に近づいてきたでしょ？？」

慶が後輩に答えると、それを聞いていた香織が慶に少しムツとした顔で言った。

「なんだ、でもコクってきたのは香織だろうがよ〜」

「それはそうだけど、ケイがイジジしてたからでしょ！」

二人が少しアツくなろうかなるまいかと言う間を見計らってか

「まあまあ、そりゃ〜君達お互い様だ」
と亮輔が冷静になだめる。

「はあ〜、そうですね・・・」
と慶は仕方なさそうに言った。

「で？いつ頃付き合ってたの？」
亮輔は少し意地悪な顔をして、嬉しそうに尋ねる。

間髪入れず、香織が

「えつとね、高校2年の時にね、私が自転車で通学してたらね
いきなり、隣にならなくてね

『へ〜、君が3組の山野香織さん？』とか言ってきたね〜
私はなんだこの変人って思ったんだけど、

それから段々、隣に並んでくる回数が増えてきてね

結局、卒業するまで無理やり一緒に通学させられてたんだよ」

と勝手に答えると、慶は自然と顔が紅潮していた。

「はずかしいからやめてくれ・・・」

「それで、お互い就職してから、2年後くらい、そう丁度20才くらい
の頃かな

突然別れてくれたって・・・。

ほんと信じられないよね、この人！！」

香織は聞かれてもいない別れの話まで話した。

「な〜んだそれ??」

「ひつどーい」

慶は大ブーイングを浴びた・・・。

そんな話から始まり、それぞれがホステスと話したり、仲間同士で話したり

はしゃいでる間に時間は過ぎて、すでに1時間ほど経っていた。しかし、21:30頃になっても他の客は見当たらなかった。

「・・・だから、あれはね、違うの、違うんだって」

「だって、ケイが悪いもん」

香織は相変わらず慶に絡んでいる。

香織は慶と再会できたことが相当嬉しいらしく、ほとんどの時間を慶との会話ですごしていた。

「だからね、俺は香織が・・・」

と慶が話そうとした途中で、お店のドアが開いた。

「いらっしや〜い！」

あゝ川崎さん、いらっしやい!!」

香織は、慶と話をしていた顔とはまた別の顔に瞬時に戻りホステスの顔になった。

「ごめんね、ケイ。 私あっちにつかないといけないから・・・」
と少し淋しそうな顔をした。

「ああ、いいよ、いいよ、仕事だろ」

慶もまんざらではなかったらしく、香織と離れるのが少し淋しいように思えたようだ。

それから、お店の客も次第に増え、慶達の席にはホステス1人が残っただけになっていた。

「あゝ、もう23:00かゝゝ

じゃ、次でも行くかゝゝ!!」

と亮輔がこの店を出ることをホステスに告げると

「えゝ、もう帰っちゃうのゝゝ?」

お決まりの返事だ・・・。

慶達がお勘定をしている様子に気づいた香織は少しソワソワし出して慶達が店から出るや否やすぐに慶を追って、店の外まで飛び出してきた。

「ねえ、ちょっとケイ!

元カノに携帯も教えないのかよ!!」

と香織は強気で慶の電話番号を聞いてきた。

「なんだ、香織ちゃん! まだ慶の事好きなんじゃないの?」

亮輔がおちゃらけて言う。

「いいなゝゝ、こんな綺麗な人」

後輩達も羨ましそうに見ていた。

「違いますよゝゝ、ほら、営業、営業!!」

「早く教えなさい! ケイ!」

と香織はさらりと話をかわす。

流石は、プロだけのことはある。

「仕方ないな〜・・・」

「あんまり無駄に掛けてくんよなよ」
と言いながら携帯番号とメールアドレスを香織に教えた。

「ふん、誰が用も無いのに掛けるもんか。
お店が暇な時だけ電話してあげる！」

香織は、相変わらずの調子だ。

「んじゃ、そろそろ行きますか」

亮輔がそう言つと、

「んじゃ、いこ〜」

「次行こ〜」

と皆も続いた。

「じゃ、また来て下さいね〜！」

と香織は笑顔で見送ったが、その直後少し淋しそうな顔に変わった。

「なんか最後香織さん淋しそうな顔してませんでしたか？」

それに気づいた山下が、慶にこっそり話しかけると

「えっ???めっちゃめっちゃ笑って、また来いっつってたら!」

「いや、その後なんですけど・・・」

山下が言うには、見送る最後に香織が淋しそうな顔をしていたと言
う。

「そりゃないだろ〜」

慶は笑って、前を向いた。

File 3 メール

深海を出た慶達は、亮輔の行きつけ2号店
プラネタリウムに行くことにした。

名前はプラネタリウムだが、まったくプラネタリウムの設備など無く
ママもプラネタリウムが好きというわけでもなく……。
少し小さめのスナックで、ママとホステスが2名
ボックス席が3席あり、2席は埋まっていた。

亮輔がお店に入ると「あつ、りょうちゃんだ!!」と
カウンターにいた20代半ばの大人っぽい雰囲気ホステスが
嬉しそうに歩みよってきた。

「あゆみちゃん、今日、5人ね!」

「は〜い」

あゆみはすぐにボックス席に案内し、
お酒の準備を始めた。

「あゆみさんって言うんですか?あの人。綺麗ですね〜」

「オマエさっきからそればっかだな・・・、ホント・・・」
山下があゆみを見て言うと、慶が呆れ顔で答えた。

「でも香織さんの方が絶対綺麗ですよ」

「オマエ、香織に惚れたな〜!?!」

山下は後輩達の中でも、気さくで良くしゃべる。
そんな山下を慶は特によく面倒を見ていた。

「はい、亮ちゃんいらっしやい」

「皆もかんぱい！」

あゆみは酒の準備ができると、亮輔の隣に座り勝手に乾杯の音頭を取った。

回りから見ると、どう見ても怪しい、この二人……。

「亮輔さん、なんかあゆみさんと怪しいっすよー！」

山下は思わず口に出してしまった。

「あーら、あなた達知らないの？」

亮ちゃんはね、私のお気に入りナンバー1なのよ」

「何言ってるんだ、あゆみちゃん……」

今度はここで深海での香織と慶とのやり取りが再現されたかのようにだった。

亮輔は容姿端麗で気さくな性格の上、よくスナックなどにも飲みに行くため

街のホステスの中でも、イイ男として結構有名だったりする。

「亮ちゃん、今日こそは家においでよー」

「バカ、そんなこと言ったら勘違いされるだろ？」

ここでも静かなバトルが繰り広げられていた。

そんなやり取りを見ざる聞かざるでいた、慶や後輩達は

カラオケを歌ったり、仕事の話をしたりして楽しんでいた。

1：00を過ぎた頃だろうか。

慶の携帯のメール着信音が鳴った。

慶は今頃だれだろう？と思いつながら

密かに香織からのメールかもしれないと期待しながら携帯電話を開いた。

「お、やっぱり香織からじゃん！」

ああいう態度をしてはみたものの、やはり香織からのメールが嬉しかった。

- - - - -
4月30日 1：08

「To」香織

「Title」今日はありがとう

- - - - -

今日はお店に来てくれてありがとう。

久しぶりにケイに会えて嬉しかったよ！

ところでさ、今日言いかけてた

いいわけの続き聞きたいな・・・。

「俺は香織が・・・」の続きをさ。

- - - - -
電話でもメールでもいいから待ってるね！

- - - - -
「・・・。 何いいわけ？ 何かいいかけてたっけ・・・」

慶はすでに酔っていたせいで、何を言いかけていたのか忘れていた。
「うーん、何て返信すれば・・・」
と考えていると

「慶さーん、歌歌！ 慶さんの歌ですよ！」
山下がそう言つと、慶はふと我に帰った。

「ああ、俺の歌う番かー」

歌を歌いだすと、歌っている間に盛り上がり、また皆ではしゃぎ始めた。

そうなるともうメールの事を考える間も無く時間は刻々と過ぎ
2：30 プラネタリウムの閉店の時間になった。

店を出るとすぐに

「俺もうだめっす、帰っていいですか？」

「ああ、そうだな、もうこんな時間だしお開きにすつか」
後輩達がダウン寸前のため、3人をタクシーに乘せ
慶と亮輔はそれを見送った。

「慶、俺今日はあゆみちゃん家いつちやおつかなー」

「えっ?? 結局約束しちやつたんですか？」

「ああ、なんかだんだん俺もその気になってきちゃって・・・」

「あーらら、俺知ーらない！
でも亮輔さん、彼女もいないし別にいいんじゃないんですか？」

「ね、ね、そうだろ？　ちょっと行ってみようかな〜」

「じゃあ、亮輔さん　ほどこにね〜！〜！」

「ああ、んじゃ、オマエも香織ちゃんとほどこにな！」

慶は亮輔の言葉でメールの事を思い出した。

「やっべ、メール返してない・・・」

「なんだ、オマエさつき携帯さわってただろ・・・。
てつきり香織ちゃんと約束してるのかと思ったよ」

「ああ、そんなんじゃないんで・・・。
それじゃあお疲れ様です！」

「ああ、じゃあな〜」

そういうと、亮輔は暗闇の中へそそくさと消えていった。

呆然と立ち尽くしていたのは慶。

メールの返事をすっかり忘れていた。
ふと時計を見ると3時前・・・。

「もう、アイツ寝てるかな・・・」

メールの内容がわからなかったこと
メールをすぐに返さなかったこと

時間が遅くなってしまったこと

色んな思いが重なって、一層メールの返信をすることができなかった・・・。

「そうか、寝てた事にしよう・・・」

こういう部分は楽天的だ。

結局、慶はメールから逃げ、家へ帰って寝ることにした。

翌朝 と言ってももう11:00

慶は目覚めると、早速香織にメールしてみることにした。

- - - - -

「To」香織

「Title」Re:今日はありがとう

- - - - -

昨日ごめん、寝てた。

- - - - -

「うーん、今の俺にはこれくらいしか打てない・・・」

慶は、結局このままメールを送信した。

朝食をパンで済ませた慶は携帯を見るが返信が来ない。

「ふーん、まだ寝てるのかな、ホステスってどんな生活してるかわかんないもんね」

そう思いながら、愛車のフォレスターを駐車場ですることにした。

14:00 洗車が終わった慶はもう一度携帯を見てみた。

「・・・。なんだまだ返信ねーじゃん。

無視されたんかな・・・」

「まあ、いいか・・・」

少しへこみ加減ではあるが開き直ってみた。

香織からの返信をあきらめた慶はブラ〜っと買い物でもしようとして街へ出かけることにし、身なりを整えていると

「ピ〜ンポ〜ン」

玄関の音ではない。

慶の携帯メールの着信音だ。

慶はあきらめたつもりだったが体が勝手に素早く動き、携帯を開いた。

- - - - -
4月30日 14:23

「From」香織

「Title」ば〜か

- - - - -

ゴメン、さっき起きました。

昨日のメール気にしなくっていいよ。

話が途中だったから、気になつて。

どうせ話の内容覚えてないんでしょ??

- - - - -

「ふむ、やっぱり話覚えてないの気づかれたか・・・。
相変わらず鋭い・・・」

- - - - -
「From」香織
「Title」Re：ば〜か
- - - - -
なんだ、今まで寝てたのかよ。オ
マエよく寝るな〜！ま〜、話は
まじで覚えてない！！すまん・・・
。

「よし、これで完璧！！」
慶は返信した。

5分後

- - - - -
4月30日 14：33

「From」香織

「Title」そつか

- - - - -

ケイは相変わらずバカで単純だね！
そんな所が好きだったんだけどね！

でもね、少しは気を使いなさい気を。

例えばさ、

「もしかして遅くまで俺の返信

待ってたの？」

とかさ〜、あってもいいよね〜
普通・・・。

あとさ、メールにはね「改行」入れた
方がいいよ！

ケイのメール読みにくい・・・。

- - - - -

「なんだこりゃ・・・」

「いきなり説教かよ・・・」

- - - - -

「From」香織

「Title」Re:そつか

- - - - -

あらそうですか。ごめんなさい。

改行を少し入れてみました。

これで宜しいでしょうか？

まー俺のせいで眠れなかったわけだ。
そりゃ〜ごめん、ごめん。

正直スマンかった。

- - - - -

と、昨夜の調子で香織へ返信した1分後

- - - - -

4月30日 14:42

「From」香織

「Title」わかりました

- - - - -

ば~~~~か!!

もういい。

- - - - -

「なんだこれ??」

「キレたか・・・」

こうなると雰囲気が悪く、慶も香織にメールを返信することができ
なかった。

結局、これから数週間はメールも電話もやり取りがなかった。

File 4 新入社員

ゴールデンウィークも終わり、5月も中盤にさしかかった頃。

「慶、慶、6月以降の生産数大体見えてきたぞ〜」

「お、ついにわかってきましたか〜！」

慶と亮輔は、6月の生産に対する人員不足数を早速計算し始めた。

「やっぱ、ここここは絶対1人ずつは欲しいですね」

「うん、やっぱそうだな〜」

「あと俺的にはここにも1人欲しいんですけど・・・」

「う〜ん、そうか。そこは係長に相談してみないとわからんな〜」

亮輔は2人の補充で当分はどうかできると思っているのだが
慶はあと1人追加した方がいいと判断している。

「なんでさ、そこあと1人必要なわけ？」

「ああ、ここですね、意外とストップ多いんですよ。
で、準備っていうかそこをストップさせないための
準備+余った時間で他の工程の育成とか
ま〜、他の工程の準備とかできたらいいな〜って」

「ああ、なるほど〜。そういうわけか・・・」

亮輔はしばらく考え、

「んじゃ、やっぱ係長に3人必要って強く言ってみるわ」

「お願いします！」

亮輔は慶を信頼しているせいか、慶の意見にはよく耳を傾けてくれた。

それから1週間後

「慶、昨日言っただけど、今日の昼から新人3名引渡すからな」

「あ、はいはいお任せあれ」

「今、有る程度の教育してるんだけど、3人とも女の子でさ
2人はめっちゃかわいいぞ！」

「えっ、まじっすか!？」

「ああ、特にな岡本って子、超かわいい」

「おお、それは楽しみだ・・・」

「まあ、それはさておき昼からは現場の方の説明と注意事項
オマエが全部指導するよ」

「えっ、俺そんなのやったことないっすよ〜」

「まゝ、大丈夫頑張ってくれ」

慶と亮輔は、新人3名のスケジュールを軽く打ち合わせた。

午後になると、早速亮輔が新人の女の子を現場へ引き連れてきた。

「え」と、紹介します。

君達が配属される工程のリーダー　中野　慶　君です。」

亮輔は早速、新人に慶を紹介した。

「中野です。まだ新人リーダーなんですが、皆さんのお役に立てるように」

頑張りますので、皆さんも是非期待に応えてくださいね」

「なんじゃ、そりや……。なんの挨拶だよ……」

亮輔が慶に少し意地悪を言ってみた。

「いいじゃないっすか、挨拶ですから……」

それを見ていた3名は緊張の糸がほぐれたのかクスクスと小さな声で笑いながら顔を見合わせていた。

「えーとじゃあ、中野に君達の紹介をするね」

と言うと、一番左側の子を指し、順に

「山田君、次が岡本君、で西田君ね」

と紹介した。

「よろしくお願いします。」

3人は少し声を合わせながら、慶に挨拶した。

「いえいえ、こちらこそ」

慶もそれに笑顔で応えた。

「では、あとは中野が全部君達に教えるから
朝教育したこと、これから中野が教えること
全てこの工場では守るようにして下さいね」

亮輔は真面目な顔に戻り、3人にそう言った。

「んじゃ、慶、あとはよろしく！」

そういうと、亮輔は事務室の方へ戻っていった。

「・・・・・・・・」

「え〜と、あ〜と、一応どいう順番で教えようかと考えてはい
ただけど

いざ本番となるとなんか緊張しちゃうな〜・・・・」

慶は思わず本音を漏らした。

すると真ん中に立っている岡本が

「がんばってください！」

と笑顔で、慶を励ましてきた。

（まじで、この子かわいいよ・・・）

なんて、綺麗な瞳と顔立ちしてるんだ・・・）

慶は流石に声には出さなかったが、心の中でそう囁いた。

「お、おう、頑張ります！」

慶は少し、声が裏返りながらも、なんとなく真面目に答えた。

「うふふ」

岡本と山田が顔を見合わせながら、そんな慶を見て笑っていた。

「じゃあ、まずは・・・」

慶は順番に工程を案内したり、注意事項や禁止事項を説明
また、誰がどの工程を担当するかなどを説明した。

16:30頃になると慶は新人3名を教育ルームへ連れ出した。

「それじゃ、この紙に今日1日で教えてもらったことや

注意すべきこと、わかるだけ書いて下さいね。

16:55になったら集めます」

と言うと、紙を1人1枚ずつ渡した。

工場内では帽子をかぶっていた新人も

ここでは帽子を脱いで素顔がよくみえていた。

（まじで岡本かわいいな・・・。

山田もなかなかのもんだぞ、これ・・・。 西田は・・・）

といつの間にか男の目になっている自分に

（いかんいかん、俺は今は教育者だ・・・）

といういろんな思いを巡らし自分と格闘していた。

「リーダー！！ 終わりました！！」

「お、早いね〜」

岡本は時間より少し前に、書き終わったことを慶に告げた。

「でもさ、岡本君・・・。

リーダーは辞めようよ・・・。

なんかさ、TOKIOのアレみたいでしょ・・・。」

と慶が軽く岡本に突っ込んでみると

「だって、中野さんリーダーでしょ??」

リーダーの方が呼びやすいんだも～～ん」

「・・・・・・・・・・」

慶失笑。

「いや、でもね、ほら

「中野さん」とか「慶さん」とかさ

僕にも一応名前があるんだしさあ～～」

「わかりました。

じゃあ、慶さんでいいですか?」

岡本が今度は軽い突っ込み感覚で慶に尋ねる。

「えっ・・・・・・・・。いきなり慶さんかい・・・・」

「なかなかヤルな、君は・・・・」

慶はもうたじたじになっていた。

「アハハ、冗談ですよ、リーダー」

「明日から中野さんって呼ばせて頂きます」

岡本もさすがに慶がかわいそうに思えたのか少しは真面目に答えた。

そんなやり取りをしている間に終業時間となり、

慶は新人3名を帰社させると、事務所へ向かった。

「いや～～、亮輔さん。

岡本ってかわいいけど、アイツは意地悪っすね」

「なんだ??おまえ早速何かやらかしたか?」

「いや、そういうんじゃないんですけど、初対面にしては突っ込みが・・・」

「おうおう、慶、いいじゃないの、活きのいいのが入ってそういうやつは良く頑張るんだって!

オマエだって、山下だってそうだろ??」

「え、いや、僕はそんなんじゃない・・・」

あ、それより、これ今日のレポートです」

「ああ、サンキュ」

亮輔はレポートを受け取ると、早速目を通しながら

「へー、岡本ってなかなかしっかりしてるんじゃない?」

「え、まじっすか?」

慶は受け取った時はさらっとしか目を通さなかったが

20分程度の短い時間でA4の用紙1枚に

今日指導されたことがギッシリと書かれていた。

その夜

慶と亮輔は二人で居酒屋へ行き、一通り飲んだ後、居酒屋を出た。

「慶、ちよつとさあゆみんとこよってかない?」

「あれ、亮輔さん、いつからあゆみちゃんのこと

呼び捨てになっ たんですか？」

「ばーか、別にそういうんじゃないよ。アイツの方が年下だし別にいいだろ〜」

「ま〜、僕はし〜らない！
でもあゆみちゃん、美人ですもんね〜」

そんな話をしながら、プラネタリウムのあるビルに向かっていると

「あら、香織ちゃんの元カレさん！」
深海のママと偶然遭遇した。

「あ、どうも先日はお騒がせしました〜」

「いいの、いいの、それよりたまにはウチにも顔出してよね〜、香織ちゃんもなんだか元カレさんと会ってから少し淋しそうよ〜」

「ええ、あいつが？ まじっすか？」

「う〜ん、今日はお熱が出ちゃって休んでるんだけどね。ほら、香織ちゃん今一人だからね、心配だから本当は香織ちゃんの家によつて来てあげたかったんだけど、連絡あったのが遅くつてね〜・・・」

「え、あいつも熱とか出るんですね？
でも、一人つてあいつ母ちゃんと別々に？」

「ううん、2年ほど前にね、お母さん亡くなったの・・・」

「え、それからずっと一人？」

「ええそうよ」

「まじっすか・・・」

慶は言葉を失った。

「ほら、よかつたら今から香織ちゃん家行つてきてあげたら？
元カレなら家の場所もわかるでしょ？」

きつと喜んで熱なんかすぐ下がるわよ！香織ちゃん！」

「いやいや、俺はこれから亮輔さんと飲みに行くし、
そんなん、香織も迷惑でしょう・・・」

「あゝら、冷たいの！だったら家の店で飲んできなさい！」

「いえいえ、もう他予約しちゃってるから・・・」

「アハハ、冗談よ、また今度、顔出してね！それじゃ」

「あ、はい、どうも」

「はあ、なんか元気のいいママさんっすね」

「しかし、慶いいのか？ 香織ちゃんとはあれからどうなってんの？」

「いや、どうって……。何もないっすよ……」

「俺、一人でプラネタリウム行ってもいいからさ、
香織ちゃんに薬でも買って持っていてやったらどうだ？」

「……。。 いや、でも……」

「オマエ本当は香織ちゃんのこと気になってるんだろ？」

「ま、まあ……」

「じゃあ、今行かなくてどうする？」

行かなくともさ、責めて薬届けてやるとか
メールくらいしてやるとかさ、なんかあるだろ」

「いや、でも、香織ふったの俺だし、いまさら……」

「慶、オマエ子供だねえ！ そんなの関係ないって。
な、とりあえず今日はここで解散だ！
俺はあゆみと仲良くやってくるからさ！」

「え……、そうすか？」

慶もなんとなく香織が心配で、飲みに行く気分では無くなっていた。

File 5 長い夜

亮輔と別れた慶は、とりあえずメールすることにした。

- - - - -

「To」香織

「Title」Re：わかりました

- - - - -

オマエ熱出して店休んでるんだって
？大丈夫か？薬ある？買ってって
やるうか？さっき偶然深海のママと
会って、そう聞いたからさ。

- - - - -

「こんなもんかな」

早速メールしてみた。

3分後

- - - - -

5月23日 20：58

「From」香織

「Title」ありがと

- - - - -

ケイも心配してくれること
あるんだね。

ありがとう。

でも、大したことないから大丈夫。

それよりも、ケイのメール見てたら
もつと頭痛くなる・・・。

もう改行忘れたの？

- - - - -

「あ、改行・・・。忘れてた・・・」
「でもなんか、強がつてる所が心配だな・・・」

- - - - -

「To」香織

「Title」Re：ありがとう

- - - - -

ちょ、電話していい？
改行忘れてごめんな。

- - - - -

メールするよりも電話した方が早いと思った慶は
香織の状態を電話で確認することにした。

1分後

- - - - -

5月23日 21:00

「From」香織

「Title」いいよ

- - - - -

電話待ってる。

ごめんなって、ケイらしくないね。
なんか変・・・。

- - - - -

慶は香織からのメールを確認すると
すぐに香織に電話した。

「もしもし?」

「ああ、香織か?」

「あたりまえでしょ、香織です」

「な〜んだ、人が心配して電話してんのに・・・」

「うん、ありがとう・・・」

（なんだ、香織素直にありがとうって・・・）

「でもね、本当に大丈夫だから。
ケイが心配してくれるのすごく嬉しいけど
本当に大丈夫だよ?」

「いや、やっぱり心配だ。」

とりあえずさ、薬飲んだのか？」

「ううん、飲んでない・・・」

「だろ？んじゃ、ちよつと買っていくから。」

オマエん家、前と変わってないんだろ？」

薬だけでも届けに行くから、待ってるよ！」

「うーん、じゃあヨーグルトとか、プリンとか
少しお腹減ったから食べたいな・・・」

「なんだ・・・？ あー、他にはいない？」

「うん、それだけあれば・・・」

「わかった、んじゃすぐ行くから、寝てまってるよ！
じゃあな！」

もうその事で頭がいっぱいの慶は香織の「じゃあ、待ってるね」
の言葉も聞かずに電話を切った。

それからの慶の行動は素早い。

近くの薬局で薬を買い、コンビニでヨーグルトとプリンを2個ずつ。
タクシーに乗ると、比較的近い香織のアパートにすぐに着いた。

「ピンポーン」

香織が玄関の鍵を開ける音が聞こえるとすぐに
慶が外側からドアを開けた。

そこにはパジャマ姿で、少し疲れた顔をした香織が立っていた。

「香織大丈夫か？」

「うん、大丈夫・・・」

（なんか、結構重症だな、こりゃ・・・）

「とりあえず、寝てろ。

薬とか用意するから」

「うん」

どこにでもあるような普通のアパート。

しかし、香織の性格かとにかく整然としている。

物の置場所は変わっているが、見た感じ

慶が昔見た、香織の部屋とそう変わってはいない。

カーテンの色が水色から紺色に変わっていて

部屋のイメージが少し大人っぽくなっていた。

「オマエんち相変わらず綺麗にしてんな〜」

「いろいろ見ないでよね!!」

香織が少し恥ずかしそうに言う。

「とりあえず食べてろ」

慶はヨーグルトをおもむろに取り出し香織に渡すと

「プリンの方がいい・・・」

「ああ、わかったよ、ほら」

慶はヨーグルトを取り上げ、プリンを手渡した。
薬局で買ってきた、風邪薬の箱から薬を取り出し、
水を用意してようやく香織の寝ているベッドの横に座り込んだ。

「よし、プリン食べ終わったら、薬な！」

「なんで2個ずつあるの？」

香織はコンビニの袋に2個ずつ入っていたプリンと
ヨーグルトの事を見ながらそう言った。

「いや、なんか俺も一緒に食べようかなって思って・・・」

「相変わらずだね、ケイつて。 かわいい」

「うるさいな、早く薬飲めよ」

「はい、はい、うるさいな、私は病人なんですけど!？」
と、少し嬉しそうに香織は薬を飲み始めた。

「あ、体温計」

慶は枕元にある体温計を見つけると

「ほれ、測ってみろ」

と香織に体温を測らせようとする。

「これは、さっき測ったからいい!」

香織が拒絶する。

慶は香織の熱が高い事がすぐにわかった。

測れって言っても、自分の前では絶対測らないだろうと思った慶は

香織の額へ左手を当て、右手で香織の左手を掴んだ。

「おまつ、やっぱり熱相当高いぞ!？」
「何度あるんだよ!!」

「さつきは、38度4分だった・・・」

「そりゃいかん、早く横になってろ」

慶はすぐさま立ち上がり、

「タオル勝手に使っぞ」

と言うと、洗面所に向かい置いてあったタオルを
水で濡らし、香織の額へ乗せた。

「これで、すこしはスッキリするだろ？」

「うん・・・」

「ケイ、ありがと・・・」

「ん？ いいよいいよ、これくらい。」

だって元カレだしな、俺は はっはっは」

と香織に素直にお礼を言われた慶の笑い方は不自然だった。

ちよつとした沈黙があった。

「香織・・・」

俺、オマエ心配だからさ
朝まで隣にいてもいいか？」

「うん、ありがとう。」

でも明日仕事でしょ？

あんまり無理はしないでね・・・」

「大丈夫。そんな事は心配しなくてもいい。
どうせ、俺も眠くなったら寝るだろう！」

「ほんとに？」

「ああ、気にすんな！」

「うん、わかった・・・」

「ケイ、本当にありがとうね・・・」

私、ずっと一人でいるから、ホント心細くって淋しいんだ・・・」

「ああ、わかってる・・・」

全部わかってるから・・・、しゃべるな・・・」

とりあえず、俺の事は気にせずに寝ろ」

「うん、ありがとう・・・」

熱で少し赤くなっている香織の瞳が潤んでいた。

それに気づいた慶は、香織がとても愛おしくあり
切なくも感じていた・・・。

（香織は本当に淋しい想いしてるんだな・・・）

慶は、眠りはじめた香織の寝顔を見ながら

香織と別れた事を後悔している気持ちに気づいた。

（こんなに、かわいくていいやつなのに・・・俺はバカだなホント・・・。）

そんな事を考えながらしばらく経つと、慶も座ったまま眠りそうになっていた。

「ケイ？　ねえ、ケイ？」

香織がうたた寝しそうになっている慶に気づいた。

「眠たいんでしょ？」

「お布団敷いてあげようか？」

「ああ、ごめんごめん、俺自分でやるから大丈夫。香織は寝てな！」

「ごめんね、布団はその押入れに、お母さんの使ってたやつがあるから、それでいいなら使って」

「ああ、わかった。じゃあ、ちょっと借りるよ・・・」
慶は押入れから布団と毛布を出すと、香織の寝ているベッドの隣に布団を敷いた。

「おばちゃん布団・・・、悪い・・・」

「うつん、きつとお母さんも慶に使ってもらうの、喜んでくれると思うよ」

「お母さんも私と一緒に、慶の事大好きだったもん・・・」

「そうか、ありがとう・・・」

「今日な、深海のママから聞いたんだ・・・」

「うん・・・さっき話した時そうかと思った。

いいの、心配しないで、お母さんの事はもう大丈夫だから」

「おう、そうか、それならいいんだけど・・・」

「んじゃ、寝るか」

「うん、ゝゝ。

ねえ、ケイ？」

「ん？」

「今日は本当にありがとう・・・」

「ああ、いいからいいから」

とは言うものの、二人だけと言う空気がなかなか二人を眠らせることができなかった。

「香織？ 寝たか？」

「ううん、なんだか眠れない・・・」

「そうか、俺も・・・」

しかし、言葉が続かない。

「ケイ？ 寝た？」

「いや、まだ起きてる」

「眠れないならさ、この前の話の続き
教えてくれないかな・・・」

「あゝ、でも俺本当に忘れた・・・」

「あのね、別れた時の話になってたのね
それで、ケイが違う違うって」

「で、私は悪くないもんって私がケイを攻めてたら
ケイが『俺は香織が・・・』って所で終わったの。
きつとケイは私が正一君と一緒に居たから
私が浮気してると思ってたんでしょ？」

「ああ、その時はそう思って・・・。
その日の夜だったかな、オマエに電話して
もう別れるって言ったのは・・・。
あとからすぐに正一から電話があったよ。
俺へのクリスマスプレゼント。

正一にアドバイスしてもらおうって思ってたんだってな・・・」

「うん・・・。

でも、勘違いされるようなことした私も悪かった。

「だけど、それを知った後でも、何の連絡もくれない
慶もひどい」

「だからさ、違うの。ほんと違うんだって。
なんか、俺から別れるって言ってしまったから
また、俺からさ、ゴメン別れるの取り消すって言う勇気が出なく
って」

「だから香織からの連絡、ずっと待ってた・・・」

「私も・・・」

「ん？」

「私もずっと待ってた・・・。 ケイのこと・・・」

「そっか・・・。」

俺達結局お互い待ってしまっ

そのまま時間だけが過ぎていったんだな・・・」

「うん・・・」

「ずっと待ってた・・・。」

だからこの前深海で会った時はすごく嬉しくって・・・」

「みたいだな。」

香織、嬉しそうに見えた」

「私ね、1時に終わってすぐにケイにメールしたんだよ。
でもケイはまだ飲んでるのかな・・・って思っ
て・・・
ケイからの返信、ず～～と待ってた・・・。」

気が付いたら6時でね、もう外が明るくなっちゃってて・・・」

「そうだったんだ・・・」

「私、今でも待ってるんだから・・・」

「え？」

「今日、ケイが私の事心配してくれて前と同じように接してくれて・・・」

あゝ、ケイって変わってないなゝって感じた。それだけでも嬉しいんだよ」

「そっか・・・」

しばらく沈黙が続いた。

「ねえ、ケイ」

「私達、また昔の私達に戻れないかな？」

「うん・・・」

「俺も・・・、今も好き・・・」

「でも・・・」

「でも何もないでしょ!!」

「私を、私を幸せにして!!」

「オマ・・・、熱あるのに・・・、積極的・・・」

「もう！！話をそらさないで！！」

「わかったから・・・」

「ホント？？」

香織がそう尋ねるが、慶から返事が無かった。

（な～んだ、寝ちゃったのか・・・。）

結局香織ははつきりとした答えを慶から聞くことができなかった。

File 6 夢のあと

翌朝

「ケイ！ ほらケイ！
起きなさい！ 朝だぞ！！」

熱が下がって少し元気になった香織は
慶よりも早く起きて、慶を起こしていた。

「うっっん、なんだよっっ・・・」

「遅刻するぞ！ もう8：00だぞ！！」

「えええええ！！ まじ！？」

慶はさすがに飛び起きた。

「うっっそでっっす、今6：30」

「なんだよ、まじでびっくりした・・・。

それよりオマエ熱下がったのか？」

そうつと、また左手を香織の額へあてた。

「うん、もう大丈夫！

全然熱くないでしょ？？」

「おお、結構下がるもんだな、オマエはやっぱり人間じゃねえ・・・。」

「朝から何よ！」

またいつもの二人に逆戻りしたかのようにだった。

「ねえ、ケイ……。」

昨日の夜の話、覚えてる？」

「ん？ああ、途中までは……。」

「え……？ また……？ ……。」

やっぱりね……。」

香織はさっきまでの元気が嘘であるかのように落ち込んでしまった。

「どうした、香織、気分でも悪くなったか？」

「ううん、何でもない……。」

香織はそういいながら、昨日慶が買ってきたヨーグルトと

買い置きされていた、食パンにマーガリンを塗って慶に差し出した。

「はい、朝食」

「あ、ありがと……。」

……。

てか、何だよさっきまでの元気は！！

どうした？香織」

「だって、昨日の事が夢みたいで……。」

なんか夢から覚めた気分……。」

そう言つと、香織は大粒の涙を流した。

「あ、香織……。」

「ごめん・・・。」

「そだ、また今度さ、昨日の話の続きしよう！」

「ね、時間はいっぱいあるしさ！」

「慶は香織にとって昨日の話がどれだけ大切なものだったのか改めて知った。」

「だって、ケイがここから仕事に行ったら、

「こんどはいつ連絡してくれる？」

「会ってくれるの？」

「香織はまた以前のように自分の目の前から消えてしまうような気がする。」

「慶と離れてしまうのが怖かった。」

「わかったから、んじやさ、毎日・・・。」

「毎日メールくらいする。」

「それから電話も！」

「ほんとに？・・・。」

「ああ、ほんとほんと絶対する。」

「だからそんなに泣いたりさ、落ち込んだりすんなよ。」

「わかった・・・。」

「そういうと、香織はテーブルの椅子に座り

「私も食べる・・・。」

「慶に出したはずのヨーグルトを食べだした。」

「ケイも早く食べてね、ホントに遅刻しちゃうよ?」

「あ……、忘れてた……。てかさ、それ、おれのヨーグルト……」

「エへへ、悪いわね!

でも、ちゃんと冷蔵庫にもう1個あるでしょ? 私の分が」

香織は頬に溢れた涙を拭きながら、慶に明るくそう言った。

「ああ、そうだ2個あったんだ」

そういうと慶は冷蔵庫からもう1つのヨーグルトを取り出しテーブルに戻ると食べた。

香織は少し気が休まったのか、笑顔を取り戻し慶がヨーグルトを食べる姿をじっと見つめながらヨーグルトを食べていた。

「ケイってさ、昨日お酒飲んだんでしょ?」

「ああ」

「ここまでどうやってきたの?」

「あ……、タクシーだ……」

セントラルホールの駐車場に車止めたまんまだ……」

「仕方ないな……、じゃあご飯食べたらずこまで送ってってあげるね」

「だって、オマエまだ熱あるだろ、いいよ、どうにかするから・・・」

「これくらい大丈夫！」

少しでもケイと一緒にいたいから・・・」

「えっ・・・。

あ、そう・・・。

それはどうもありがとう・・・」

素直にそういわれると、慶はなぜか少し緊張してしまった。

「アハハ、ケイってほんとかわいい」

「なんだよ、かわいいって・・・」

二人は朝食を終え、香織は慶を送るための身支度をし
慶はそれを玄関で待っていた。

「おーい、ちょっとやばいから急いでな！」

「はいはい、もうちょっと待ってね！
すぐ行く」

そういうと、髪を整え、少しラフな服装に着替えた香織が
玄関へやってきた。

（あれ、香織ってこんなに美人だったわけ？）
慶はあらためて、香織の美しさに気づいた。

「ねえ、ケイ、ちょっと待って。
昨日のお礼したいんだけど・・・」

「あ、別にいいよそういうの」

「違うの、ちょっと、少しだけかがんで欲しいな・・・」

「ん？こっか？」

そういうと慶は膝を少し曲げ、香織の顔の高さまで自分の顔の高さを合わせた。

香織は少し照れながら、慶の額にキスをした。

慶はそれに驚いた。

「わっ、びっくりしたー！」

「エヘヘヘ、昨日はありがとう！」

香織は何事もなかったかのようにお礼を言った。

「でも、久しぶりだな・・・」

慶は我に返り、とにかく時間が無いことで頭がいっぱいになった。

「てか、早く出るぞ、まじ遅刻しちゃう・・・」

「ああ、そうだったね、急がなくなっちゃ！」
そう言くと、二人は香織のアパートを出た。

香織のアパートから、セントラルホールまでは市街地の中を通る道で、多少混雑していた。

「ところでさ、何がひさしぶり？」

「え？」

「さっき、家出る前

オマエ言ってただろ？」

「ああ、あれね・・・」

「うん、それ」

「あのね、ケイにチューしたの・・・」

「きつと4年半振りくらい？・・・」

「ああ、そっか・・・」

「もうそんなになるんだな・・・」

「うん・・・」

「でもさ、それから今まで1度も会わなかったって
不思議だよな・・・」

「こんなに近くに住んでるのに・・・」

「私はね、何度かケイを見かけたよ・・・。
でも、声掛けるのが怖くって、
隠れたりしてた・・・」

「そうだったんだ・・・」

少し車の中の空気が重くなった。

二人はもうすぐ、別れてしまったため今はそういう話をしている時間が無い。

お互いにそれをわかっていてか、それからの会話ははずまなかった。

「もうすぐ着いちゃうね・・・」
香織が口を開いた。

「ああ、いいじゃん、どうせまた会えるさ」

「ほんとに？」

「ああ、ほんとほんと」

「絶対だからね！」

「ああ、わかってるって」

「メールとか電話もしてよね!？」

「ああ、するする、ちゃんとするから」

「約束だよ!？毎日だからね!？
忘れたら絶対許さないからね!？」

そっという会話をしているうちに、慶が車を止めている場所に到着した。

「それそれ、俺の車」

「へ〜、なんかカッコいいじゃん」

「ああ、今度乗せたげるな！」

「ほんと？」

「ああ、それじゃ、時間ないから俺行くな」

「うん！」

「ケイ・・・。」

「ホントありがとう！」

「ああ、いいから、いいから！」

そういうと慶は香織の車を降りて、自分の車へ急いで乗り込んだ。
香織は慶が駐車場から出てきて、慶の顔が見えなくなるまで
手を振り続けた。

「はあ〜あ、帰っちゃった・・・」

「でも、な〜んかよかったな〜」

香織はそう思いながらアパートへ引き返した。
香織の心はいつもより晴れ晴れしていた。

File 7 受付

慶は、一度自宅に戻るとシャワーを浴びてすぐに会社へ向かった。取り合えず時間内には会社に着くことができたが、これからが勝負だ。

チャイムが鳴る8：15までに、更衣室で一旦社服に着替え、自分の受け持つ現場に行かなければならない。

慶は焦りながらも、焦っていることを表に出さないようにし、当然であるかのように更衣し、現場へ向かった。

（ふゝ、なんとか間に合った・・・）

現場へ到着するとすぐ

「お、慶、今日は遅かったなゝゝ。」

昨日なにかいいことでもあったのか？」

すぐに亮輔が擦り寄ってきた。

「いや、何もないっすよ、まじで。

ちゃんと看病してきただけですから・・・。」

「なゝゝんだ、オマエら面白くないの！！」

「亮輔さんこそ昨日は」

（キゝンコゝンカゝンコゝン）

「あチャイムだ」

慶は亮輔が昨日あゆみとどうなったのかと聞こうとしたが

結局聞けなかった。

朝礼が終わると、慶はさっそく新人を集め今日の作業の説明を始めた。
簡単な説明が終わると、あとは現場の担当者へ付かせ作業内容を慶が確認するという形だ。

10:40

慶が亮輔と休憩室で休憩していると、岡本と山田が休憩室へ入ってきた。

「ああ、ちょうどよかった!!」
実は岡本は慶が休憩室へ向かうのを見計らって、休憩に来たのだ。

「中野さん！朝帰りお疲れ様!!」

「ぶっ!!」
慶も亮輔も飲んでいたお茶を噴出した・・・。

噴出して口の周りについていたお茶を手で拭きながら
「なんだよ、急にびっくりするなあ!!」
慶は動揺を隠すかのように言った。

「朝、見ましたよ!!」
綺麗な女の人の運転する車で、セントラルホールの
駐車場に入っていたでしょ!!」

「えっ？、なんでそんな時間にそこ目撃するかな〜」

「だって、新入りは会社に早く来なくっちゃね！」

「てか、それ早すぎだろ？」

「いいんです、いいんです！」

それよりも彼女ですか？

やっぱり彼女ですよ〜、朝帰りだし」

岡本はニヤついた顔で慶に言った。

「残念ながら違います！」

彼女ではありません！」

「え！？　じゃあ何なんですか？

あんな綺麗な人滅多にいないし、

だいたい、彼女じゃない人と朝帰りなんて変ですよ？」

「ん・・・。　それを言われると困るな・・・」

見かねた亮輔が

「ああ、慶の幼馴染でね、彼女今一人暮らししてるらしいんだけど

昨日、熱があつたみたいで、慶にヘルプがかつたの

だからその時慶と一緒に居た俺が言っただけって

無理やり彼女ん家に泊まらせたわけ」

半分本当で、半分嘘の話を即座にでっちあげた。

「ふ〜ん、なあ〜んか怪しいけど

そうだったんですかあ〜

折角ネタができたと思ったのになあ！」

「なんだよネタって!!」

慶は思わず突っ込んだ。

「でもあの人綺麗だったな」

「ん？誰？誰？

誰が綺麗だったの？」

丁度そのタイミングで山下が休憩室に入ってきた。

「をつ!!」

山下は思わず声を上げたが、すぐに我に返った。

（この子達超かわいい・・・）

山下も岡本と山田の可愛さに驚いた。

「んで、慶さん、誰が綺麗だった？」

「ああ、この工場の受付をされてる女性の方の事を話してたんです」
岡本がすぐさまフォローを入れた。

「ああ、京子さんね！」

山下は慣れ慣れしく京子さんとか言っているが
実はほとんど面識はない。

工場でも一番の美貌の持ち主として有名な受付嬢だ。

「ああ、京子さんね・・・」

慶がなんだか暗そうな声で答えると

「さ、行くか」

亮輔がそれに合わせるかのように言い二人とも休憩室から出て行った。

「なんだ？あの二人・・・、ねっ！」
慶と亮輔の雰囲気が少し変わってしまったことに誰もが気づいていた。

それから山下は話題を変え、やたらと自分をアピールしようと、5分ほど一方的にしゃべり続けた・・・。

「あ、それで昨日はあゆみちゃんとかどーだったんですか？」
慶は亮輔と一緒に事務所へ向かいながら、亮輔に尋ねた。

「ああ、昨日？ まあね！」

「なんすか！？ そのまあね！って！
いいな、亮輔さんはいつもモテモテで
ゆきさんでしょ、あゆみちゃんでしょ、
この前のプラネタリウムの彩ちゃんともいい感じだったし！」

「ははは、そうかね・・・
きつと騙されてるだけだよ俺達！」

亮輔は自分がホステス達にモテているとは、自分ではまったく思っていない。

ただ、これが普通だと思っているようなようだ。
人から好かれると言うことに関して、小さな頃からそうだったために無頓着なのだ。

「でも、いいっすよ、亮輔さん絶対モテモテだって！」

「でも香織ちゃん、俺が知ってる女の中じゃ一番綺麗だけどな」

そんな雑談をしている間に、事務所のドアの前まで来ると

（ガチャ）

丁度、事務所の中から1人の女性が出てきた。

「あ・・・、森山さん、中野君、こんにちは・・・」

（げっ・・・。）

慶は思わず心の中でそう思った。
事務所から出てきたのは、休憩室で丁度話の出た畑野 京子であった。

「ちわつす・・・」

慶は小さな声で挨拶を返したが、亮輔が挨拶を返す事は無く、ただ、目を合わさないようにしていた。

京子は、軽く会釈をするとすぐに早歩きで去って行った。

「俺は京子さんが一番綺麗だと思います・・・。」

慶は小さな声でそう言ったが、亮輔は黙って事務所へ入っていった。

今日はノー残業デーであるため17：00になると、従業員は全員帰っていった。

慶と亮輔は、少し仕事が残っているため、まだ事務所に残っている。慶の方が、少し早く仕事を済ませ、それから10分くらいして亮輔も仕事が終わった。

「亮輔さん、歓迎会しませんか？」

「ああ、そうそう俺もそれ考えてた」

それから二人は、次の土曜日に新入りの歓迎会を計画することにした。

「じゃ、これから歓迎会の打ち合わせに行くか!？」

「ああ、打ち合わせですね!？」

打ち合わせという言葉に意味は無く、これから外食に行こうかと亮輔が誘い

慶もそれに応えただけのことであつた。

二人は結局いつもの居酒屋へ来ていた。

居酒屋へ着くと、慶がおもむろに携帯を取り出しメールを打ち始めていた。

「お、めずらしいな、オマエがメールするなんて」

「あ、すいませんちょっと待ってください。」

(約束だから仕方ない・・・)

「ははあゝゝ、香織ちゃんか・・・」

「知りません!-!」

慶は香織に香織の体調のこと、仕事が終わりに亮輔と居酒屋にいるこ

とをメールした。

すぐに香織から返信があり、店に出勤する前にここにくると書いてあった。

そのメールを見た慶は

「げっ!!」

思わず声に出してしまった。

「ん? どうかしたのか?」

「ああ、すいません、後からちょっと香織がここに来るかもしれませんが・・・」

「いいですか?」

「ああ、いいいいいよ、俺も香織ちゃん見れるの嬉しいな〜」
亮輔はニヤついた顔でそう言った。

二人がビールを飲みながら、晩飯を食べ始めてしばらくすると

「やつほ〜!」

香織がやって来た。

「おっ! 香織ちゃん、いらっしやい!」

亮輔がすぐにそれに気づき香織を迎えた。

「オマエ、もう店出れるの?」

「うん、昨日慶が来てくれたから、もう元気になっちゃった!!」
香織は恥ずかしげも無くそう言つと、
勝手に慶のビールを飲み干した。

「あゝあ、見てらんない・・・」

亮輔は香織が慶にぞっこんである事を確信した。

「亮輔さん、昨日はごめんね、慶と一緒にいたんでしょ？」

「なんで知ってんの？」

「だって、慶が自分の意思だけでわざわざ家まで来るはずないもん！」

「きつと、亮輔さんが行つてこいって言ったのかなゝって思つて」

「おゝ、香織ちゃん、読みが深い・・・」

「慶、昨日はほんとありがとうね！」

「それじゃ、私もう行くから！」

「えっ！？はやっ！」

「だって、もう遅刻しそう」

「あ、もうそんな時間なんだ！」

「よかつたら飲みにも来てね！」

「それから慶、明日も明後日もちゃんと私にメールするんだぞ!？」

「はいはい、わかつてますよ・・・」

てか、亮輔さんの前でそんな言つなよ・・・」

「関係ない！ それじゃ、またね！ バイバゝゝイ！」

そついうと香織は急いで店を出て行った。

「なんなんだ・・・」

「台風みたいだったな・・・でも、慶にお似合いだぞ！」

「てかさ、何？毎日メールとかなんとかって」

「ああ、今日の朝約束させられまして・・・」

「は～～ん、また寄り戻したか？」

「いいえ、そうじゃないんですけど、なんかそういう雰囲気で・・・」

「オマエ、付き合う前から尻に敷かれてるんだ～～」

「アハハ・・・、付き合う前って、付き合うかはわかんないじゃないですかあ！！」

「ま～～いいじゃん、いいじゃん、オマエらしいコンビだよ、まじで」

そつ言いながらも、慶は少しだけでも香織と会えたことが嬉しかった。

「しかし、店に出る前の香織ちゃん、マジで綺麗だったな～～」

「そうでしたかね？」

そつは言っているが、慶も同感だった。

「ねえ、亮輔さん、言っている？」

「ん？ 何の事？」

「京子さんのこと・・・」

「ああ、それはいい」

「でも・・・」

「でも、くそもない。俺はふられたんだから・・・」

「でも、きっと京子さんだって今でも亮輔さんの事が好きだって思いますよ？」

「うるさいなあ、もういいから。」

俺にはあゆみとかいるからいい！！」

「あゝあ、そうやってあゆみちゃんに逃げてるんだ！？
もしそうだったら、あゆみちゃんがかわいそうじゃないですか？」

「いいの、俺はあゆみが今好きなの！！」

「へえゝゝ、そうなんだ・・・。うそつき！！」

慶はそうやっておちやらけると、それ以上京子のことでは話すのをやめた。

結局その日は、居酒屋を出ると二人とも帰ることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4200c/>

リトルタウン

2010年10月12日02時36分発行